

产田友门卷之書

187
481

6

187-481
1200800100301

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



東洋書院藏書

一六〇行五部

第六拾貳

七十一の部





本館貴重叢書

此書刊行五百部
第六拾貳号

七十部



六正
6. 7. 9
購求

产田友門覺書

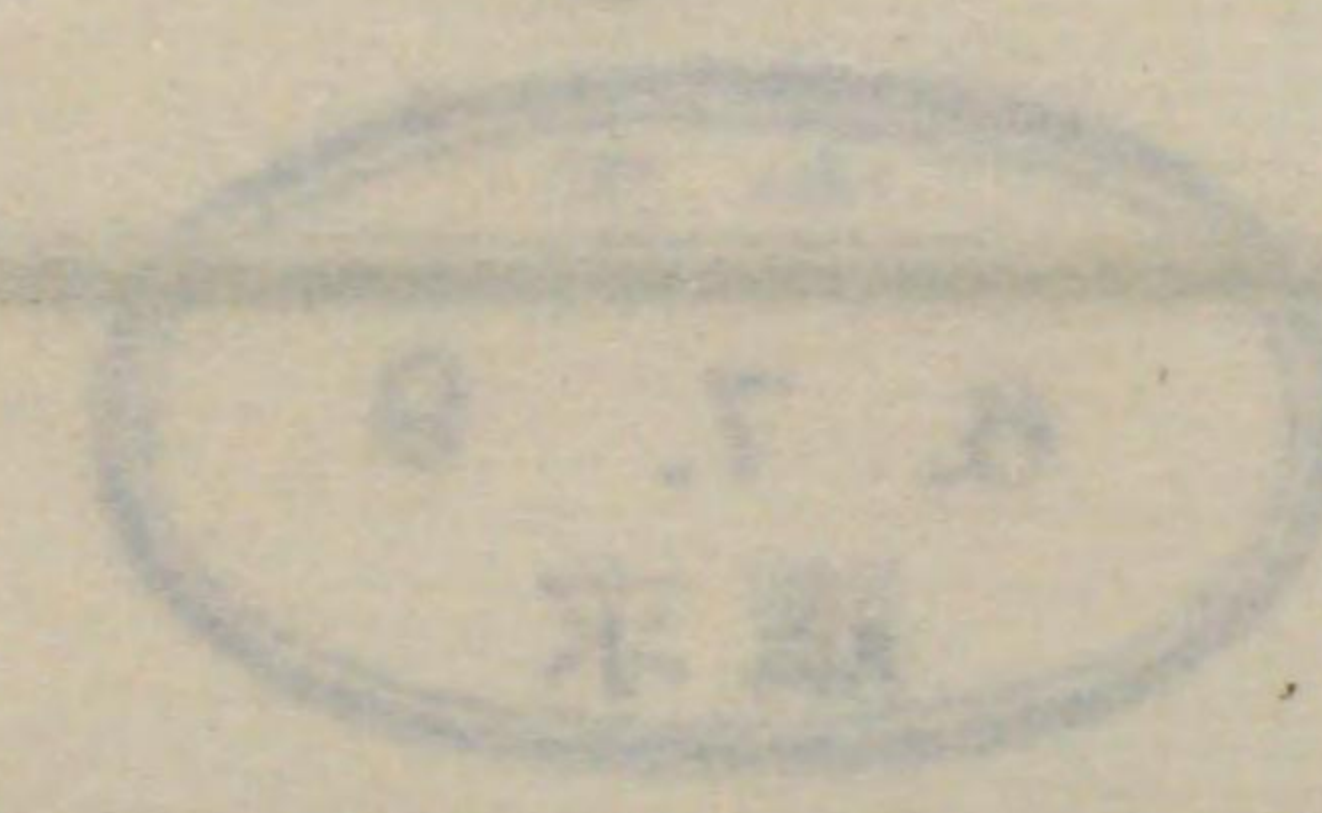
六月... 友門覺書... 此書...

廣長二... 六月... 友門覺書... 此書...



廣長二... 友門覺書... 此書...

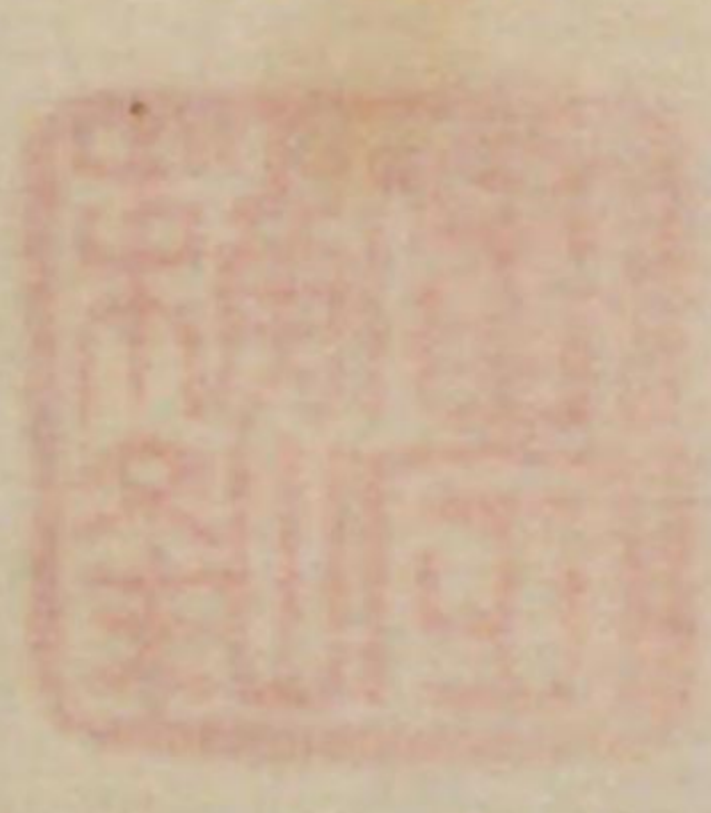
友門覺書



手回九七二馬書

慶長三戌年

五月大 朔乙酉



又日為瑞午之沙礼 内府家康之始諸人及之

右向門對面各退出以後右向法不例



出書院常不伏之... 任者親法脉書安院中上列之平生
の法... 京... 醫師... 法... 書院
... 老中... 藥調進
... 通... 院... 法... 書院
... 各書院
... 書院

六日... 書院... 法... 書院
... 書院... 法... 書院
... 書院... 法... 書院

二三貼出用ひは移せしめて次第に法を色重く被
ぬ皆事すまへり付て後竹田法印じりて西薬四又貼
紙の上は紙を又重しおんやひ

下旬の比は法合事おしと逐日減し一月初より
法肉もから法法人事おんやひ

六月小 朔乙卯

十六日ら嘉祥の以祝 右箇の法代り座敷の間と法菓子
と並其座敷の當頂戴しとれ候

る箇座敷の上は法浦園やおんやひ秀頼公法

名法長終して法名座敷の中は法菓子座敷
指君

後よりしりる法聖澤は石田法印少増田右衛門尉

長束を法少補入各刑部少富田右近衛監少播磨守

片桐市正前田徳善院 意等頂戴し其時太閤法

ら別は秀頼十五歳の時よりとて法名を法秀頼と

てその主とかりては法徳城に居りおんやひおんやひ

おんやひ命宛り法名を法秀頼とす其時法名を法

その座敷の面は法名を法秀頼とす其時法名を法

法名を法とす其時法名を法とす其時法名を法

法名を法とす其時法名を法とす其時法名を法

往來して活動甚し

右活動のより世々一開京記といふ書にありて六月十六日何と
かくはえん系活動にいふ一内府公は城の治を教へり
内府公は井伊守の教の教を以て教へり内府公は
何の御教にあり活動し始むりやとせしやとせしやとせしや
めえりし事ありの教方とせしやとせしやとせしやとせしや
はてしなくの記を度々合を組の大か。活動しこれの所より起り
あるの事ありめ教へりし事ありしやとせしやとせしやとせしや
人とせしやありしやとせしやとせしやとせしやとせしやとせしや

述日右同法を痛

八月八日 朔 甲寅

十八日午刻右同薨去

内府公は同の治を持嫌うといふ
一この法は城の事あり石田守の方より候ふ八十歳と云

右同法境界の事告り治を城の事とせしやとせしやとせしや

依り治を治し治を内府公は治を治すといふ

して治入魂をかきふた度之事とせしやとせしやとせしや

治を十年まじりこの治を治すといふ

思ふにお遺る方と治を治すといふ

め一日を治し右同法境界治同の十日に治すといふ

開京より上は内府公は治を治すといふ

治を治すといふ治を治すといふ治を治すといふ

治を治すといふ治を治すといふ治を治すといふ

とありて、岡家のいふのよし、治部がと打果すゆゑといふは、
きこしめさるおぬのお話あつと、おぼろしき日、
治部がうき世に、おぼろしき日、
事かくしぬお浮田、このあふは、おぼろしき日、
すゝ火、おぼろしき日、

其の、内府を、伏見の中、
あつと、おぼろしき日、
作、おぼろしき日、

三月小 朔 辛巳

廿六日、中崎、清屋、補、
伏見、清屋、
おぼろしき日、

三月小 朔 庚戌

十日、伏見、清屋、
おぼろしき日、

その比、前田、利家、
おぼろしき日、
利家の、おぼろしき日、

折付多岐の備前及中務少輔郡州小山次とて上方に赴か
大崎より八山岳及び河津を遊上

八月六日 朔 辛未

初日伏見落城多岐郡長尾村平之殿相平又たつふお城より
此下とてきた右字津文とす也

五日 内府より急ぎ書付しつゝ此方中務少輔井伊守が
方分飛脚とて追々中巡依之景祐お押詰城未康後行
守殿

中代と人相して伊達陸奥守之乳上も相寄城久を記すその外
那須由利芦田牟川坊せ長か、此後並

四日 内府より急ぎ書付しつゝ古河に泊

又日 古河より清、母、水おる栗橋の西橋
切れる所

六日 江戸出入

去者忠公も急ぎ書付しつゝ八月半に於て又て水おる立
徳洲上田吉田安房守、居城とて清中尚本官路出上九月十
六日

此はあきこれふりて
官守のまふ合さるす

内府より村越斎助と書付しつゝ上方路を押し並へて大石

并小由中務少輔井伊守より急ぎ書付しつゝ斎助あふと見え
本官路出上り急ぎ書付しつゝ由りすあ人相寄り清中尚本官路出上り

いかに多分合と 内府より白ひをり何やん御中上と云々細々
息一きり人救きし人上よりしとせかしのりあり

十日掛川清泊

十一日濱村清泊まふ法了とある

十二日合谷中納言立花た迫あふ大津の城を攻め立上る城守

城守京極宰相高野と書送

はる九月十四日大津の城を攻め合谷中納言立上る城守の
一戦ふも返すに四りすく大津の城を攻め立上る城守の
間合二日詰りの事とすし合谷と高野と書送大津の城を
攻め立上る合谷中納言立上る城守の事とすし合谷と高野と
の戦ふ事とすし合谷と高野との戦ふ事とすし合谷と高野と
の戦ふ事とすし合谷と高野との戦ふ事とすし合谷と高野と

治平の初佐和山にもく十日計逗留大垣宿諸路九月上旬京京お

十四日午刻濃州赤坂より河津山と河津陣におく

敵は京京南の方南定山東の端を越陣毛利田安園寺と

加小西掃部と書我々南定と陣北の方京京河津河

宰相脇坂中務その外又畿内中国の諸路がてお備とす

内府より右の方あり

向く赤坂の橋を越る徳田了然く城守す南の方
押之河を遠江に渡り能徳田了然く城守す南の方

の方あり 内府より右の方あり

内府より掛山に御免の名治平の大垣よりいづく其日申刻戸田

民少平塚因幡守と同心京京は

治平の初治平は尾山の下自言うとす下り陣す下る者不吉

以のちをいふ市や上流に定る跡は新お知所なる布し
敵のたのまを言成に押お敵路の海に敵軍お知所の通路
北切きしゆん様とい各乃るなるれはし敵方をばや
至るより有るきしと丑の別がの各と打浦より海
子細のしとし言 内府より海よりおおの井伊よりあり
此は伊賀沼次命と書くと書進毎夜は道筋を窺りよ
御意あり市志田百と通しまおと初大垣お
戸田氏親が海軍の補より内府より海よりおおの
阿の旗印とく味方の海に廻し跡を遠るさ人あり

果おる上十騎鉄炮百挺を付けたの各諸へお中より我
伏置きて内府押行後お中お伏置起し一の打立大方なる
河邊なるし何人お敗軍おるも地取守るおるし勝利
當年おりのしとく海軍が用ひす民戸たる南黄母長の元
武功のなるおの波の心にお通すし
内府より林札のし腰とくは内府より海より味方の大
とくくまはし目見下御守殿 清四郎後 組打は負出
井伊より少く福嶋大吏と不和ありそれ火おし一お中を
始るおのし福嶋大吏と合戦とれ諸

又里具中一押付しし翌十六日より城と北是城中の者より
為る小立道あり人取り加増と後小長谷川式部快砲千挺
内猪快砲二匹城中又籠内しとて重き内府より内通丁上
長小給中と忠告治戸少又石田院政入道と治戸少弟
石田赤子助実京敗軍とき十六日朝自言すとい治戸少頼
石田の吉十二軍傳の男忠ひて連者高野山といをり治戸少
幾田少左衛門達うけた吉捨重逐電す治戸少山治戸少
好勇有てるり波寺のお家おく後京路うてい成敗
十六日内府公大倉刑部少左衛門殿川清一宿

十六日山崎村に波寺あり一日は城あり

十七日長原河泊

十八日大津城あり

大津城に迫進するに津旗本の人數多き重丸瀬田村の
邊より津信代人の死に日神忠栗田口迄御先子のとるん

新也 は津人殺らるるに津田
つるのうらまはるる事

暫大津に逗留する治戸少小西治戸少お國を埒田方の針糸は金
味方の諸人石田院政

廿八日大津をとりか立候なり

廿九日大坂御記

十月大 朔 未

朝日石田治戸少西接はちあはち之人京中を以て之條
河原におく島本首

於大坂西の丸より西へかきかへて天下の人を内府
おはするに恰も関の時のごとく

今度敵討のものを頼りては行ふ討賣す千尋あふ
並へ並きたいひした事とさうしんを配分するに
何事やられは天下のみ物とて内府もも百金

の程方中へかき内府もさう大圓と教めお知り
ぬく出おはけ何事小力少くも物のなを二所持あふさきや
はるや一平も百金とすもくく人あはらむ

その後お聞九立の人あはる後世御正と申すは
秀頼とて何方に居候しとて内府も大坂少西へ
天下の由は並治けはとて内府も返答今度御
我とて一己たりふお意と振廻んよの根は謀叛と企
げよと承秀頼の由後見とさかへしとておは
中納言娘と秀頼とを承すへきとる百金ぬるは

作をんかそ長七壬午年沙輿大坂入
秀忠卿御娘沙輿流
 久保打孫守由興久保の清地久保系久保より愈々頼と
 由より久保四海静澄久保と久保の久保内府久保法
 殿久保日久保一久保打つ久保事久保宣下久保の事ありと頼と
 由久保一方久保と久保か久保れ久保後久保法久保々久保妻久保子久保を久保い久保戸久保、久保と
 毎久保年久保開久保東久保、久保系久保動久保し久保こ久保れ久保天久保下久保沙久保一久保統久保あり



『戸田左門覺書』は、筆を慶長三年五月太閤御不例よ
 り起し、慶長七年秀忠娘秀頼へ入興に終る。覺書の
 眼目は、關が原一戦にありと知る可し。是書は當時
 目撃耳聞者の記録なれば、其の片言隻語亦た史の闕
 文を補ふに足るものあり。而して本書は實に白石新
 井氏の手寫にして、其の字體清雅朗麗、蓋し白石慣
 家の墨跡也。卷首に天爵堂圖書記及び玉繩の印あり、
 首尾に君美の印あり。併せて其の手澤の存する所を
 徴す可し。今之を複製して、同好に頒つに際し、白

石編述の『藩翰譜』より戸田左門父子の傳を抜抄す。而して本書の著者は、子の左門氏鐵となす。

大正三年 八月念二 蘇峰 學士 白人

戸田左門

左門藤原一西は、徳川殿の御内にて、當時に名を得し勇士也、

一西が事、甲陽軍鑑等にしるせる事少からず、○此人元は戸田にあらずといふ、或人の曰く、一西が妻は、

二連木の戸田松平波守康長の娘、徳川殿の御姪なり、思ふに康長初め智ながら、子として、名字を名のらせしにや、いまた其家の系譜を見ざれば、詳かなる事をしらず、

此人一生の高名、多き中にも、元龜二

年五月、武田入道信玄、吉田の城に向ひ、まづ四郎勝頼山縣三郎左衛尉昌景が勢を分て、城を攻めんとす、酒井左衛門尉忠次、諸軍を下知して、打て出づ、一西真先に進み戦つて、武田が家の侍一人當千と

聞えたる廣瀬郷左衛門尉と、互ひに名乗て鎗を合はす、

甲陽軍鑑に出づ、○按ずるに、家忠日記増補に戸田廣瀬鎗を合せし事は、此後天正三年武田四郎勝頼が代になりて、長篠を攻

めし時の五月六日の事と記せり、覺束なし、天正三年五月六日の戦は、吉田の城外はじかみ原にての事なり、

また天正三年八月、遠江國小山の城を攻られし時、武田四郎、

二萬餘騎を引率し、後卷すと聞えしかば、引返させ玉ふ所に、城中よりも打て出づ、一西酒井左衛門尉忠次大津土左衛門と同じく取て返し、追ひ來る敵を打破る、其後天正十八年、小田原の城攻られしに、

一西して御手の人々の軍する様を見せられたり、

諸手働き目付といひしなり、

今年關東に移り玉ひしかば、武藏國鯨井

の地を賜り、

五千石

慶長五年、東西一時に軍起りし時、中納言殿に屬ひ參らせて、山道より馳上り、信濃

の國に至り給ひ、真田安房守昌幸が籠たる上田の城を攻めさせらる、評定あり、本多佐渡守正信、只打捨て御通りあれと勧め參らすれば、宗徒の人々、正信の計にこそ因るべけれどと申旨もなし、一西一人進み出て、某が存ずる所、速に攻められんには若くべからず、殿の御軍は、今ぞ始なる、御年も盛り

なり給ひぬ、道の邊りに出向て、御勢遮らんずる敵をば、一々打破て御通りあらんずらんところ、大殿にも思召べけれ、夫に只すごとくと通らせ玉はんも、餘りに、穩便に覺えて候と申、佐渡守正信大に怒て、たゞ正信に任せらるべしとて、御供して上りしに、關ヶ原の戦事終りぬ、一西が申せしに違はず、上田を攻めさせ給はぬ事、大御所の御氣色宜しからず、此時に至てこそ、人々も口惜き事に思ひたれ、神原か傳合見べし明れば慶長六年二月近江國大津の城は、要害宜しからず、勢田に移して、一西にたぶべしとて、國々の大名に課せて、膳所が崎に城築かる、奉行八人を附て、夜を日に繼て、催されし程に、功頓て成しかば、所領餘多附て、一西にぞ賜りける、三萬石を領す、○按ずるに、此城は當家天下を知召して、最初に築かれし所なり一西此城に在る事三年にして卒し、子息左門氏鐵父に繼ぐ、大阪の兵起し時、大御所都に上らせ玉ふと聞て、矢橋の浦まで御船を參らせて、御膳を薦め奉る、我身は仰を承て、此城にぞ留りける、元和二年、攝津國尼が崎の城に移り、五萬石寛永十一年七月十六日、從四位になされ、同十一月美濃の國大柵の城に移る、十萬石同十五年の春、肥前國島原の逆徒追討の御使として、松平伊豆守信綱と共に馳向て、九國の軍勢を下知して、攻亡す、同十八年八月三日、若君御誕生在しかば、氏鐵仰を蒙て、御竹刀を献る、慶安四年十一月廿八日、致仕入道して、常閑と號し、明暦元年十二月十四日、七十九歳にして卒す、嫡子采女正氏信父に繼ぐ、寛文七年十二月廿八日、從四位下に叙し、同十一年七月十八日、致仕剃髮して、一閑と號す、嫡子左門氏包讓りを受く、其子采女正氏定といふ、「新井白石編述『藩翰譜』より抄出」



187
481

大正三年九月二日印刷
大正三年九月五日發行

(戶田左門覺書與付)
定價金壹圓

發行所 民友社
印刷者 渡邊爲藏
發行者 德富猪一郎

不許複製

東京市京橋區日吉町三番地

